

---

# 嘲笑[改訂版]

月影舞月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘲笑「改訂版」

### 【Nコード】

N4471V

### 【作者名】

月影舞月

### 【あらすじ】

とある家庭の、ひとつの悲劇。少年、猫、その父、別れた妻の四人に関わる「嘲笑」のお話。

一ヶ月ほど前に、彼は変貌していた。ついこの間までは、青春とは恋愛である、だとかキャンパスライフについて自分の意見を語るなど、学校に関わる様々なことの何たるかを吾輩に向かって豪語していたくせに、最近ではその影も見せず、周囲から引かれるくらいに情熱的な性格はなりを潜めた。

吾輩にとって、彼の長つたらしい、そして結論のない説教を聞くよりも、黙考して考えを纏めてもらうほうが断然良いのだが、しかし彼を通じて無駄な知識や、人それぞれに違う、偏見の一つ一つを彼の愚痴から知ることが出来ていたため、それがなくなると退屈させられる。猫というものがどれだけ退屈を嫌っているか知らないだろう。

猫という生き物は、いつもぼつ、としていると思われているだろうが、それは違う。我々は観察を行い、その後目を瞑ってしばしそこから様々なことを推理する。そして飽きるか、結論が出たら、寝る。そのような生き物なのだ。人間は、全く以てその事を知らず、己の偏見で猫というものを判断している。

話を聞かせる、と抗議の声をあげるも、しかし彼はぶつぶつと何事かを呟くばかりだ。解りやすいように、吾輩はすたすたと彼の視界に入ってやった。しかし、その虚ろな瞳は手に持っているぬいぐるみを捉えるばかりだ。

それで気づいたのだが、彼の目の下には深い隈が出来ていた。どうやら最近は何も寝ていないらしい。暗澹たる表情で彩られていることから、精神的にもどこか参っているだろう。……そのとき、「お母さん、どうしてあなたは僕をおいて行ったんですか？」と、確かに、彼は言った。だが、半開きの口からは、それ意外の、吾輩の興味を惹くような言葉は出てこなかった。

彼は男のくせにくまのぬいぐるみをぐにぐにと押しながら、己の悲しみをかすれた声で訴えている。そして、それがだんだんと変化していき、ついに、不安しか感じられない訴えに変わった。

## 二

大学を卒業したらどうしよう、と僕はぬいぐるみに問いかけた。僕の足元で、僕をじっと見つめる彼は、僕をみている。もしかして、彼は僕のことを心配しているのだろうか。いや、そんなはずはない。きつと、彼は僕を嘲笑っているんだ。

蹴り飛ばす。「にやつ」と飛び上がって、彼はそれを簡単に躲した。それ以上構う余裕は僕にはない。だが、黙って蹴られていれば僕の気も晴れたというのに、コイツは意地が悪いと心のなかで毒づく。僕は視線を彼から、母にもらったぬいぐるみに向ける。そして、心の底に沈殿する母への怨念を自覚しながら、何も答えはしないぬいぐるみに話しかける。

大学を卒業したらどうしよう。就職できなかつたらどうしよう。僕の成績でちゃんとした企業に雇ってもらえるだろうか。……

様々な不安が僕の口から飛び出し、ぬいぐるみに浴びせられる。ぬいぐるみは何も言わない。言うはずもない。もしも母がいたならばなんと行ってくれただろうか。大丈夫よ？ それとも、もつとしゃんとしなさい？

今はもういない人に思いを馳せても、なにも始まらない。それに彼女は、僕の高校時代にあった虐めによって発狂して、それにうんざりして離れていったのだ。彼女はもう、僕のことなんて忘却の彼方に追いやっているだろう。

けれど、そんな母の形見のようなぬいぐるみの顔に浮かび上がっている表情は、僕を嘲笑っているようにしか見えなかった。それが、母の気持ちのように感じられて　僕はぬいぐるみを床に叩きつけた。母への恨みを込めて。

柔らかい体を打たれ、それは小さな悲鳴を上げたように思えた。

だが口元に浮かべられた嘲笑は、歪みながらもしつかりと僕を捉えている。それが母の気持ちを代弁している気がして、僕はそれを踏みつける、何度も、何度も。縫い目の内側から、その白い肉が飛び出始める。  
気味が悪い。

自分の近くにあることが怖くて、僕は小瓶に入った白い粉末を指先につけ、ペろりとなめた。それだけで、気分が軽くなっていく。まるで魔法のようだった。だが、僕をじっと見つめるぬいぐるみを見ると、気分が一気に重くなった。そのまま、沈む。沈んでいく。蹴り飛ばす。それは壁に叩きつけられ、だがそれでも、ぬいぐるみの浮かべた嘲笑は依然として僕を捉えていた。……

### 三

吾輩は飛んできたぬいぐるみをひよいと躲し、彼の様子が一段とおかしくなったことに身の危険を感じた。これではいつ狂うか解らない。日頃のストレスから発狂した人間は、近くのモノを壊す傾向が強いと彼の父が言っていたのを思い出した。

そして、意味の解らない奇声を発し、壁に頭を叩きつける彼を見て、思わず飛び上がった。瞳からは涙がボロボロと零れ、ごめんなさい、ごめんなさいと悲痛な声で叫び出す。

一体に何に対して謝っているのだろう。人？ モノ？ それとも、…… 解らない。

額から血が流れだし、応じて、その動きは激しくなる。痛みを耐え切れず叫び声を上げるも、しかしその行動はやめない。

本当に、狂っている。己で自傷を自傷と思えない状態は、正常な生物から見て狂っている。おそらく彼は幻覚や幻聴の類のものを、現実にあるものと認識しているのだろう。

動物として、それが恐ろしかった。正常でなくなることの恐ろしさを目の当たりにした吾輩は身の毛がよだった。そして、その動きが激しくなり、腕を振り回しだしたのを見て、己の身に危害を加えら

れる可能性があるかと悟った。吾輩は、半開きの扉からずりりと抜け出し、その場から離れた。

……だが、ふと視線を感じて背後を見ると、扉の向こうから、あのぬいぐるみがこちらに笑顔を向けていた。

それが、臆病者を罵る嘲笑に見えた。……

#### 四

二階から、息子の叫び声と共に、鈍い音が響いた。叫び声が続く、鈍い音は、だんだん大きくなっていく。自傷行為でもしているのだろうか、と私は考えた。以前もこんな事態があったため、前回ほど私は焦っておらず、むしろ冷静だった。

私は傍らのコーヒーカップを手に取り、黒い液体を口に含んだ。それはいつもとは違った、不快な味だった。

徐々に、別れた妻から、手紙があつたせいだろうか。それとも、不快な雑音だらけだからか。両方かもしれないし、別の理由かもしれない。

わからない。

ふと、妻と別れた日に飲んだコーヒーも、このような味だったと思いだした。

妻と別れたのは、息子の高校生活の中頃だった。彼はその頃酷い虐めにあり、精神が不安定な状態になった。母親譲り繊細な性格がそれに悪影響し、彼は精神疾患となり、不安定な状態を悪化させることになった。

自然、妻が彼の看護にあたったが、……日に日に増していくストレスに耐え切れなかったのだろう。

最初に発狂したのは彼女だった。彼女はまず、麻薬に手を出した。私の手元にあつた、研究用のものがあることを知っていたため、使ってしまったのだろう。それを続けて、……私がそれに気づいたときには、幻覚・幻聴の類を発症していた。あげくには息子を殺しか

けていた。一体何故、そんな行動を起こしたのかは解らない。狂人故だろうか。

それがもとで息子は発狂し、それを原因に妻は離婚を申し出た。そんなことが、ありありと思い出された。そして、知人のツテを頼り妻にリハビリをさせ、それを慰謝料替わりにして別れたというところまで考え、そこで息子の見せていた兆候を思い出した。

彼自身は気付けていないようだったが、一ヶ月ほど前から、別れた妻の発狂する少し前と、酷似した行動を見せていた。

それは、虚空を眺めては、ラテン語（別れた妻は英語だった）で何事をか呟くというものだった。私が知る限り、このような症状は存在しない。症状ではなく、副作用というべきものだ。そのことから、私は彼女の陰を息子に見ないわけには行かなかった。そこで、気づく。

私は自室に向かった。もしも、私の考えた通り息子が麻薬を摂ってあのような行動に出たのだとしたら、……

はたして、その不安は事実だった。私の研究していた麻薬の一部が、わずかだが持ち去られていた。もしかしたら、息子ではないかもしれない。私の友人が提供した量を私が覚えそこねているだけかも知れない。

……だが、そんなことはありえないと、心のどこかで断じていた。そこで、ふと気づいた。本が開かれている。本棚を見ると、そこにあつたはずのギリシャ神話の本がなかった。開いた窓から涼風が流れ込み、ぱらぱらとページが捲れる。そのページには、モモスのことが書かれていた。私は、それに皮肉と、息子と妻を狂わせた男に対する嘲笑を感じずにはいられなかった。……

## 五

階段を降りる。吾輩が向かう先は、精神科医である彼の父親のもとだ。彼は静かな場所を好んでおり、そこに行けば、危険と闘いながら、狂人の奇行を延々と観察するよりも余程有意義な時間を過こ

せるだろうと思う。

だが、部屋から出ても、彼の行為によって生じる音や彼が発する声は響きわたっている。家の外にその音が漏れていないことを祈るよりほかない。彼の父は、リビングで読書をしていた。読んでいる本は、ラヴクラフト全集だった。百科事典と見間違うほど分厚さだが、そういえば彼は「人間の心理を知るには、これが手っ取り早い」と言っていたのを思い出した。

その間も、彼は絶叫している。もうすこし静かにして欲しいと思う。彼の父は、彼が落ち着くまで本を読むと決めたようだ。

吾輩はその膝の上に飛び乗って丸くなった。

そこでふと、彼の母は彼の異常な行動が原因で別れたということ进行を思い出した。それと、彼の父がラヴクラフトのような人間の心理を、恐怖を描いた作品を読みだしたのはその頃からだった。

それから、精神科医ならば彼らの異常な行動を止めることもできるのではないかと考えた。人間の心理について調べたのだから、異常者の心理くらい解って当然なのではないかと吾輩は考える。

「嘲笑の神、モモスカ」彼の父は苦笑を浮かべた。それから、本を閉じて、己の部屋へと向かうために立ち上がる。吾輩はそれと同時に飛び退いて、すたりと着地した。そのまま、彼の父についていく。鴛張りの廊下を通って、彼は自室にたどり着いた。そして、机の上を開かれた本をじっと見つめていた。ここからでは内容は見えないが、彼の表情は自虐的な笑が浮かんでいた。

彼はラヴクラフト全集を本棚におおして、小さく溜息を付いた。それから、吾輩を見て尋ねる。「お前は、この僕をどう思う？」

答えられなかった。吾輩は沈黙し、しかし彼は上からの音が止んでいることに気づいた。静寂が辺りを支配していた。彼はテーブルの隅に置いてあった縁無し眼鏡を掛けると、踵を返し、吾輩の返事を待たずに、落ち着いた足取りで去っていった。

呆れつつ、吾輩は彼が部屋から消えてから、椅子の上に飛び乗り、そのまま机の上へと飛び乗った。と、その拍子に白い粉末の入



った小瓶を蹴り飛ばしてしまふ。一瞬ヒヤリとさせられたが、中身が少量溢れでるだけにとどまったので安心した。

ふと、猫としての好奇心が開かれたままの本から、その粉末に移ってしまふ。そして、つい、ペロりとこぼれた分だけを舐めてしまつた。

途端、火のついていた好奇心が消され、どんどん気持ち沈んでいく。何もしたくない、何も出来ない、自分では……と、負の感情が膨らんでいく。そこで吾輩は漸く、彼の父が友人に依頼されて麻薬を研究していたことを思い出した。おそらく、ソレだろう。

仕方なく、吾輩は開かれている本に視線を向ける。好奇心が少しでも生まれたら動くはずだからだ。しかし、そのために動く気すらおきない。動いたって何の意味もないじゃないか、好奇心のために無意味な行動を取るべきではない、と……誰かが、言う。

人間ならばそこで止まるだろうが、吾輩は猫だ。好奇心は再点火し、埋み火のような好奇心を持つてして、漸く吾輩はページの一節を読み解いた。そして、ふと思つた。

軽率な自分の行動を嘲笑う誰かが、吾輩のすぐ近くに居るのではないか。もしかしたらそれが、モモスの使いなのかもしれない。……

## 六

部屋に入ると、飛び込んできたのは一面の赤。それと、鉄さびの臭いが充満していた。その元凶は息子だった。額から流れる血は、私が入る前まで、自傷行為を行っていたことが容易に推測できた。何度も額を打ち付けた跡から、私は少なからぬ狂気を感じた。

「なにをしていた？」

「誰かが僕を掴んで叩きつけるんだ」

即答。彼は、学校でも同じことをされたことがあつたと答えた。おそらく、高校時代の虐めの際にあつたのだろう。だが、何故この時期に自傷行為が始まつたのかは解らない。

やはり彼は、私の研究に使っていた麻薬を舐めたのだろうか。証拠

は見当たらないが、探せば白い粉末の入った何かが出てくるだろう。もしもそうだとしたら、なんと言えば良い？ 叱責するのか、それともどうするか。

大学生活ももうそろそろで終わる。そのため、変なプレッシャーが神経質な性格に悪影響を施していると考えられるのではないだろうか。それに、このようなパターンは神経質な人によくある。女々しいと思いつつも、私は希望を捨てたくなかった。

だから、私は患者に対する質問を息子に続けようとした。狂い始めた理由が解っているというのに。これではまるでお道化だと思っただ矢先だった。

息子は、ヒツと小さく息を呑んだ。そして、そのまま後退り、視線を私から虚空へと移す。

「来るな、来るな！ 僕は何もしていない！」

その言葉は私に向けられたものではなかった。全身から見て取れる怯え。まるで自分を殺す誰か（・）がそこにいるかのように、息子は手だけで、後ろへ、後ろへと進む。一体彼に何が見えているのだろうか、私にはわからない。そして、背中が壁にぴったりとくっつくのと、急に苦しそうに呻き、突然後頭部を壁に打ち付けた。彼の黒髪には乾ききっていない血が付着し、また、後頭部からも血が流れる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

彼は、繰り返す。恐怖に歪み、涙でぐしゃぐしゃになっていた。しかし、後頭部は打ち続ける。まるで、誰かにそうされているかのように。

彼には、自分の顔面をつかんで壁に叩きつける誰かが見えているのだろう。

一体それは誰だろうか。

そこで私は、ギリシャ神話の「一番偉いゼウスの神でも、復讐の神には敵わない」という文章を思い出した。

彼の復讐の神が、彼を殺そうとするのだろうか。……  
そう考えながら、私は、ただ見ていた。何も出来ない己が、無力で、息子一人助けられない自分に対して齒噛みする。だが、仕方のないことと断じているところもあり、自己嫌悪に陥る。  
息子の向かい側に、ぬいぐるみがあるのを見た。それは別れた妻が息子に贈ったものだった。私は思わず、そこに彼女の面影を見た。彼に取り憑く復讐の神は、彼女なのだろうと、その時確信した。そして、ぬいぐるみの浮かべる笑みが、彼女が息子に送った嘲笑のように感じられた。……

## 七

吾輩はふらふらになりながら、リビングに向かっていた。自分を嘲笑うモモスの影をはつきりと感じるのは、吾輩がヘロインを舐めたせいなのだろうか。しかし、それだけとは思えない。まっさきに吾輩が思い浮かべたその姿は、……

この間、暇つぶしの散歩に出ると昔の恋人に会った。彼女は吾輩を見ると、恨みがましく「死んでしまえ」と吐き捨てたのだった。もしもその時に「帰って来て」と言ってくれたのなら、危険を犯してでも戻ったかも知れない。だが、それで吾輩は吹っ切れたと思っていた。

どうやら、それは間違いだったようだ。忘れたくても忘れない思い出だ。

忘れたいさ、昔の恋人のことなど。猫の社会では異端扱いの自分は、もう戻ることとはできないと解るだろう？ 名前も持たないオマエに居場所はないのだ。

……けれど、忘れられない。女々しいと思いつつも、愛した女性の姿は脳裏に焼き付いていて、彼女の言い放った言葉も……

吾輩のモモスの姿は、彼女だろう。だが同時に、<sup>エリニクス</sup>復讐の神も……

吾輩は、また、上から物音と、彼の絶叫をきいた。暗澹たる思い

と裏腹に、彼には並々ならぬ恩を感じているため、気だるげな体に鞭打って、吾輩は彼の様子を見に行く。一步步くたびに音を立てる廊下を抜け、リビングを通って階段に向かう。その頃には気力も尽きかけていたが、進む。近づくほどに絶叫が大きくなっていき、壁を叩く音は大きくなっていく。だんだんと、好奇心が湧いてきた。

先程までの心持ちに、光明が差したような気がした。私は恩義云々を忘れ、ただ好奇心だけで階段を進んだ。だんだんと速度が上がっていき、気づけば私は、悔しそうな、しかし諦めに近い表情を浮かべた彼の父と、涙を流しながら、しかしその口元に謎めいた笑みを浮かべたまま後頭部を壁に打ち付ける彼がいた。

そこに、私はエリニユスの姿を見ずにはいられなかった。彼にとつてのエリニユスは、おそろく……

## 八

ふと、別れた夫のことを思い出した。私はその時、夕飯の用意をしていた。そういえば、先日彼に手紙を出したが返事がきていない。もう私のことなど関わりたくないようにしたのだろうか、それとも、忙しいだけなのだろうか。

個人的には、後者のほうが嬉しい。私は、彼と何故別れたのか、あの時の自分の行動が愚かしく思えてならない。私は包丁の野菜を切る音を聞きながら、ゆっくりとその時のことを思い出していった。彼と別れたのは、息子の学校が冬休みに入った頃だった。その頃、息子は酷い虐めにあっていて、そのため、精神的に参っていた。そして、精神疾患となり、時たま奇声を上げては、自傷行為を行う、情緒不安定な状態になっていた。

彼は病院に勤めていたため、私が介護をしなくてはならず、だんだんと、ストレスが日増ししていった。勿論それだけでは離婚に至らなかったが、しかし、あるきっかけで事態は悪い方向へと向かっていったのだ。

ある時、夫の帰りが遅い日があった。その時には、息子はいつにな

く喚き、激しく自虐した。まさにその行動は、狂人のそれだった。私はもう、限界だった。そして、夫が、友人から依頼されて麻薬の研究をしていることを思い出し、少量なら、効果も大きくないだろうと思ひ、手を出した。彼の部屋に入り、白い粉末の入った小瓶を見つけた時の喜びと、しかしこれから行うことの罪悪感が入り交じり、私は何度も戻ろうとした。しかし、もう無理だった。半ば自棄になつて、その粉末を、少量舐めた。すると、今まで感じたことのないような快樂が私を襲つた。夫とのセックスなどよりも、余程刺激的な何かが。それは数分間続き、しかしそれが終わると、ああ、なんてことをしてしまったのだろうという罪悪感と、もし、これを夫が知ったらどうなるだろうかという悪い妄想にとりつかれた。

その後は陰鬱たる思いのまま、息子の世話をした。その日は、夫に使つたことを知られなかつた。

その次の日、私はまた、それに手を出してしまつた。他にも同種の瓶があつたのに、私はそれ以外に手を出す気はなかつた。そして、次の日も……

だんだんと頻度は高くなり、気づけば、一依存症していた。

その頃になつて、夫は私の状態に気づき始めた。その日は、麻薬の置き場所が替わつていたが、私の良心は無に等しく、とにかく快樂に身を浸したいという欲望に取りつかれていたため、私は狂つたようにそれを探しまわつた。引き出しの中を荒らし、そこに見つからなかつたため、机の上を引つ掻き回した。拳銃の果てには、部屋中をぐちゃぐちゃにした。

漸く目的のものを見つけたときには、夫の部屋は泥棒に入られたような有様になつていた。しかし、それを見ても私は何も思わず、その時はただ、子供のように喜んだ。そして、いつもより多く摂取した。

いつも以上の快樂。失神する寸前だった。膝が笑つて、ぺたんと尻餅をつく。私はブルブルと震えていたが、急にそれが途切れた。

そして、ああ、いったい私は何をしてしまったのだろつかという暗澹たる思いに晒された。

それに加え、その頃になると、微風にさらされるだけでも体が痛むなど、副作用も大きくなっていた。私はやめることのできない己を恥じた。そして、二回の息子の部屋に向かった。すると、そこにいたのは息子ではなく、全身が真っ黒な「何か」だった。私は、何故かそれが自分の命を狙うものに見えた。そして、無意識のうちにその首に手をかけていた。

何故、私がそれを、殺そうと思ったのかわからない。しかし、私はそれが、物凄く嫌で、……力のかぎり、絞めました。それは呻き、初めはもがいたが、だんだんと抵抗をやめていった。

そして、「母さん、殺して」と言った。その瞬間、黒い影は取り払われ、苦しげな表情で懇願する息子の顔が、目の前にあった。

思わず私は手を離し、正気を取り戻した。いったい自分が何をしていたのかを理解し、悲しみで泣き崩れた。だが、彼は憤怒し、私を怒鳴りつけた。

「殺せ、殺してくれ。僕はいないほうがいいのに、何で殺さないんだ」

地団駄を踏み、己の太ももを何度も彼は殴りつけた。そして、奇声を上げ、子供のよう腕を振り回した。それは、狂人そのものだった。私は見てもいられず、目を背けていた。

だが急に、その音がやんだ。荒い呼吸は静かなものへと変わっていった。不思議に思ってみると、そこには、冷徹な瞳で、微笑を浮かべた息子がいた。

その時私は、その息子を、なにか別のものと捉えたと記憶している。

そして、気づけば彼の顔が私の下にあった。そして、その首元に己の手がかけられていた。息子の顔には、微笑が浮かべられていた。私はそれが怖かった。そして、その時別れた夫が帰ってきた。私は首から手を離し、下に降りて、自分の行ったすべてを話した。そし

て落ち着いた頃に、別れたいという旨を伝えた。夫は当たり前のように受諾し、アフターケアまで考えてくれた。

彼には確かに感謝しているが、私は、記憶の中で、最も鮮明に写っている息子の嘲笑を思い出した。そして、思わず嘲笑を浮かべた。それは己に向かつてか、それとも……

## 九

カフェでコーヒーを飲んでいたら私は、彼女が店内に入ってきたのを見つけると立ち上がって手招きした。彼女は、久しぶりに私に会えたことを嬉しく思ってくれているのか、微笑を浮かべて私に近づいた。

彼女の顔つきは、別れた当時とは違っており、若い女性らしさと共に、気品を感じさせていた。思わず、「ずいぶんまともになったな」と口を衝いて出た。彼女は一瞬、その表情に暗い影を落としたが、それを振り払うように笑うと、「だって、もう二年もたったのですから」と答えた。

彼女に席に座るように促すと、私も席に着く。

「手紙の返事にあんなことを書いて悪かった」と私は開口一番に言った。「それに、手紙をもらってから一ヶ月も経っていたから、もう相手にされないかと思っていましたよ」私がそこまで言うと、彼女は「そんなことないですよ」といった。その言葉が本心から出たものと察し、嬉しかった。

私たちの間には、静かな沈黙が流れた。心地良い沈黙だった。

口火を切ったのは彼女だった。

「……息子が自殺したというのは本当ですか？」

と彼女は尋ねた。私は、全てを話そうと思っていたので、黙って頷いた。彼女にはそれが信じられないようだった。色の白い表情が、ひどく青ざめていた。近くを歩いていた店員を呼び止め、私は紅茶を持ってくるように頼んだ。

「どうして、自殺を？」

彼女は、震える声で私に尋ねた。私は彼女に、「そのまえに、紅茶が来るまで待とうじゃないか」と提案した。彼女はしぶしぶといった様子で、私の提案を受け入れた。

また、沈黙が流れる。今度は重苦しいものだった。

店員が紅茶を運んできた。私は彼女にそれを勧め、彼女は、震える手でそれを取った。そして、少量口に含んだ。彼女は「美味しい」と感想を言い、「それはよかった」と私は返答した。

「息子は、大学でも虐めにあつたのですか？」

「それはないだろう。彼は、高校時代と違い、大学では友達が多かつた。勉強熱心で、……しかし思えば、強迫観念に駆られている所があつたかも知れない。彼の勉強に対する熱心さは、少し異常だった」

私の言葉に、彼女は首をかしげた。「おそらく」と、一旦私はそこで切り、「彼は、良い企業に入社せねば、といったようなプレッシャーがあつたんじゃなかるうか？」

「それで、いい成績を取らなければ……と、考えたのですか？」

彼女は、なるほど、と頷いた。しかしこれだけでは自殺の理由にはならないということを知っていたようで、私の説明を待った。だが、私は話すのを躊躇った。ここまできて、しかし本当にこれをお話すべきかと悩んだ。

「話してください」と彼女は私に言った。その表情には固い決意が見られ、これからのようなことを話され手も受け止めるだけの覚悟をしたようだった。私は、小さく頷くと、その時の記憶を徐々に思い出しながら、彼女に話した。……

三日前のことだった。彼は発狂した。今回が二回目で、一回目は彼女と別れた時だ。原因は、恐らく、ダウン系ドラッグ使用後の禁断症状。それに耐え切れず、彼は自殺したのだらう。

私はその時、家にいたので彼の異常に気がついた。それで、彼の部屋に行った。初めは、なだめて、自傷行為を止めようと思っていた。だが、部屋に入るとそんな気も失せた。壁一面に彼の血が付着して



おり、彼は笑いながら、己の体をカッターナイフで切りつけていた。私は唾然とした。そして、私の姿を認めると、微笑した。

「父さん、あなたはVim patiorという言葉の意味を知っていますか？」

私は彼の質問に、解らないと答えた。彼は、「そうですね」と呆れたように言うと、「圧迫に耐えるという意味ですよ」

私は彼が何に圧迫を感じているのかが解らなかった。私は思わず沈黙した。彼は哄笑し、そのちに私を嘲笑した。それが、私を無能と嘲ったものだとすぐに解った。「他人を救えるくせに、家族を救うことはできないだなんて」と彼は笑った。

私たちの間に沈黙が流れた。私は下に降りて、包帯を取ってくるいいい、彼に踵を返した。すると彼は、「ねえ」と私に声をかけた。私はそのまま進もうとしたが、彼はこう言った。「このぬいぐるみ、どういう表情に見える？」

思わず、私は振り返った。そのぬいぐるみは、彼女が息子にプレゼントしたものだ。それは一面に笑顔を見せていたが、私にはそれが嘲笑にしか見えなかった。

「Vim patior. 父さん、圧迫に耐えていたんでしょ？」

私には答えられなかった。息子は、そんな私を嘲笑って、「死のう、一緒に」と言った。私は耳を疑った。彼はいつの間にか右手にカッターナイフを持っていた。そして、そのぬいぐるみを見ると、地面に叩きつけた。そして、刃をそのぬいぐるみに突き立てた。何度も、何度も。切り裂き、突き刺し、その時彼は「漸く、だ。漸く解放される」と嬉々とした表情で叫んでいた。彼がそのぬいぐるみに何を見ていたかはわからない。だが、恐らく私と同じものを見ていたのだろう。

私の隣で、猫が鳴いた。いつの間に来ていたのだろうか。猫は、息子をじっと見ていた。そして気づけば、息子はその動脈切り裂いていた。止める暇もなかった。私は唾然としたまま、棒立ちしていた。

猫は私を見ると、「にゃあ」と一声鳴き、それから部屋から去っていった。私には、その時の猫の表情が嘲笑に見えた。……話が終わり、いつの間にかうつむいていた私は顔を上げた。彼女は泣いていた。嗚咽することなく、彼女はただ、涙を流していた。

十

吾輩は、彼の父が家から出たあとに、彼のことを考えていた。

彼の考えていた圧迫というものは、全て彼の妄想だった。

中学生の頃から、彼は自分の母が己を不必要と考えていると思い込んでいた（彼の母は周囲よりも覚めた性格をしていたから、そう思い込んだのだろう）。そして、彼の父もそう思っていると思い込んだ。彼は自分が不必要とされないためには、彼らが自分を必要とするくらいに聴くなればよいと考えた。そして、必死に勉強した。

勿論、彼の両親はそんなことを考えているわけもないので、中学生の頃から全く変わらない態度をとっていた。彼は余計に必死になり、だんだんと、一つの強迫観念に駆られるようになった。

「自分が必要な存在にならないと、居場所がなくなる」

そんなことはないというのに、彼は、己を追い詰めた。そして自分で作ったハードルの高さに挫折し、プレッシャーに屈した結果……彼はああなった。彼の話をいつも聞かされていた吾輩しか、このことを知らないと思う。恐らく、彼本人も気づいていなかったのではないだろうか。

彼は、誤解したまま自殺した。その誤解のために、自殺したのだ。……

もしも吾輩が野良猫だったら、このことで野良猫仲間と談笑していたのだろうか。おそらく、話すとしたら内容はこうだ。

「若い人間が、この間自殺したらしい」

「へえ、その理由は？」

「プレッシャーに耐え切れず、だそうだ。といっても、そのプレッシャーはただの思いこみだったのだがな」

「プレッシャーで自殺するなど、訳が解らん。それ以前にプレッシャーを感じる場合ってどんな場合だ」

「解らんよな」

と、……

恐らく、話し相手と共に、吾輩は彼に嘲笑を送っていただろう。

外では、もう路<sup>ひき</sup>が咲いていた。陽気な日差しが、庭を照らしていた。縁側に出た吾輩は、うとうとと、まどろみに沈んでいった。

春は、希望と同時に絶望も多い季節だということを考えながら。

……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4471v/>

---

嘲笑[改訂版]

2011年8月6日08時55分発行